

タイトル	明治時代における外国人誘致目的のガイドブック刊行の意義：1893年シカゴ万国博覧会における北海道案内記を中心として
著者	加藤，由紀子
引用	北海商科大学論集，2(1)：48-63
発行日	2013-02

明治時代における外国人誘致目的のガイドブック刊行の意義

－1893 年シカゴ万国博覧会における北海道案内記を中心として－

A study of the significance of an English language traveler's guidebook to
Hokkaido for foreigners in the Meiji Era : A study of "An Itinerary of Hokkaido"

加藤 由紀子 Yukiko KATO

要旨

1892 年に英国人宣教師ジョン・バチェラーによって出版された日本北海道案内記は、1893 年のシカゴ万博会場で来訪者に配布する目的で書かれていたことから、初期の外国人むけの北海道旅行ガイドブックといえる。北海道案内記は総論と行程部分に分かれ、北海道の将来性と地理上の優位性だけでなく、外国人が自分たちの生活水準をできるだけ維持しながら旅行することができることが記述されている。さらに、スポーツレクリエーションを中心としたアクティビティやアイヌを中心とした文化の記述は、これまで日本側の要請で作られてきた自然などを「みせる」観点から、「体験する」観点で書かれていることが分かった。北海道案内記の資料はマレー社の日本案内書に利用されたため、長きにわたり多くの外国人の目に触れられてきた。さらに万博会場で、輸出品のみならず案内記で北海道を紹介できたことから、この北海道案内記の刊行の意義は深いと考えられる。

キーワード : 北海道旅行案内記 来道外国人 ガイドブック

Abstract

"An Itinerary of Hokkaido" ,written by British missionary John Batchelor in 1892, can be described as the first guidebook for travelers to Hokkaido. It is divided into two parts ; general remarks on Hokkaido and an itinerary. It was written for distribution at the Chicago Exposition of 1893,not only to introduce geographic features and future potential of Hokkaido, but also to provide foreign travelers with practical information about daily living. In addition to descriptions of Ainu culture there was a focus on activities and recreational sports. It was written in terms of "experience" instead of "sightseeing" that had been the characteristic of guidebooks previously published about Japan. The inclusion of "An Itinerary of Hokkaido" was significant because it followed the pattern used in Murray's Handbooks to travel in various parts of the world, which had been familiar to many foreigners for a long time. Batchelor's guidebook was able to publicize not only the products of Hokkaido but also to introduce important aspects of the culture of Hokkaido.

Key Words : An itinerary of Hokkaido foreign travelers to Hokkaido guidebook

1. はじめに

北海道観光は正念場にきている。否、北海道だけではない。日本の観光が転機にさしかかっていると言ってよい。松下幸之助が「観光立国」を提唱したのは、今から60年も前の1954(昭和29)年であるが、観光立国推進基本法が成立したのは2006(平成18)年である。拡大するアジアの国際観光に対し、日本は後れをとっているのはいなめない。現在、インバウンド誘致は地域経済活性化の切り札として、多くの地方自治体の注目を集めている。2011年度の東日本大震災前は好調に推移し、日本全体で史上最高の外国人旅行者を受け入れたが、それでも世界での国際観光の位置づけはまだ30位であった。もし震災がなければ本当にこのまま順調に伸びていったのか、もう一度原点にもどって、訪日外国人誘致に何が必要なのかを考えてみる必要がある。

我が国の訪日外国人旅行者(インバウンド)誘致の歴史をたどると、1893(明治26)年の喜賓会(Welcome Society)設立から始まる。受け入れを中心とした同会も国際親善と貿易の発展を目指し、引き継いで1912(大正1)年に設立されたジャパンツーリストビューロー(Japan Tourist Bureau)は、明治の末期、日露戦争後の財政難を、外客誘致によって外貨の獲得を図ることがその使命であった。一方、北海道函館市は1854(安政1)年の日米和親条約でいち早く開港し、北海道開拓使は開拓のために外国人顧問団を招聘した歴史がある。その人数は、1871年~1881年で78人にのぼり、その6割は米国人であった。このように北海道では明治初期から、観光目的ではないものの訪日外国人が来道していたことから、明治時代の北海道の様子をどのように北海道内外に伝えていたかを調査することにより、外国人誘致に対する当時の考え方を再認識することができる。そこからこれからの誘致策に時代を超えて必要なもの、展開できるものを意義として探求することが本研究の目的である。

2. 対象とする案内記の概要

北海道のガイドブックで古いものでは、1889年に北海道庁が発行した「北海道旅行便覧」があるが、主に交通案内書である。1910年に札幌博光社発刊の「北海道旅行便覧」では、表紙にローマ字表記も見られるが、現在のJR営業規則にあたるものが記載されており、いずれも日本人対象である。

一方、英文版としては、1892年に英国人宣教師ジョン・バチェラー¹によって出版された「日本北海道案内記」²がある。外国人によって記述された文献のなかで、北海道について記述があるものはいくつかあるが、ガイドブックとしては、アーネスト・サトウとアルバート・ホーズの「日本旅行案内(1884年)」³がある。発行年としてはバチェラーの北海道案内記より古い、所々にバチェラーから資料の提供を受けたり、アドバイスを受けた旨の記述があること、また、「日本北海道案内記」は巻頭の緒言から、アメリカの万博会場で来訪者に配布する目的で書かれていたことが明確であるので、外国人旅行者対象のガイドブックとしては、初期のものであるとし、日本北海道案内記を対象とした。

2-1 北海道案内記の概要

北海道案内記（写真2-1）は次のように章立てされている。

第一章は地理や歴史などの総論、第二章では、行程記となっており、追録で行程記にもれたいくつかの地方と、巻末に函館港概表などのほか、北海道地図と挿絵が3点ほど集録されている（表2-1）。さらに英文版には広告が入る。広告掲載者は、金森商店（書籍・文房具・時計宝飾品・洋服仕立と服地・その他卸売）、田本研造写真館、函館新聞、森亀精肉店、東洋堂（洋菓子とアルコール飲料・缶詰搭載）、平田商店（金物・器械）築地タイプライター・北海道セメントであり、当時の外国との通商の様子がかいまみられる。

写真2-1 北海道案内記



出所：国立国会図書館（マイクロフィッシュ）

表2-1 北海道案内記 章立て

巻頭	第一章 総論	第二章 行程記	追録	巻末
挿絵と緒言	1. 地理 2. 蝦夷歴史 3. 千島 4. 他の諸島 5. 北海道地形 6. 山嶽 7. 開墾に適する土地 8. 気候 9. 河水 10. 草木類 (A) 樹木 (B) 灌木 (C) 年草 11. 動物 (A) 胎生類 (B) 鳥類 12. 鉱物 13. 魚類 14. 北海道通商の関係	1. 交通の事 2. アイヌ人の事 3. 遊猟 (A) 漁業の事 (B) 銃猟の事 4. 遊猟 5. 旅装 (A) 衣服の事 6. 旅装 (B) 食物の事 7. 蝦夷地において2週日間を費やすべき行程 1. 函館 2. 湖水及び駒ヶ岳 3. 室蘭より「ピラトル」に至る事 4. 「ピラトル」より札幌に到る事 5. 札幌	有珠 登別火山 上川 函館港	函館港概表 函館より内外各地への海陸里程 北海道概表 北海道地図 挿絵 （北海道士人の風俗・北海道庁の図・函館市街の図）

2-2 北海道案内記の特徴的な記述

第一章の総論の地理には、面積や境界線など、歴史ではアイヌ人の居住、蝦夷地の由来、松前藩の成立、開拓使の成立と北海道への改称、日本各地からの移住と農業殖産、ケプロン招聘、人口の増加などが記述されている。また、千島については、位置・面積と千島樺太交換条約と一般的な情報であるが、その他の島については奥尻島を除き注目すべきものはないとしている。

バチェラーは奥尻島を興味ある島と記述しているが、その理由は日本の中では例外的に厳しく禁酒を守っているのもあって、観光的な意味あいはない。奥尻島では、島の苦しい生活をよくするには、酒を飲まないで仕事にはげむことが大切であるとの考えかたから、沢口富士吉の呼びかけで1885年に禁酒規約が定められ、以降5年間禁酒の島となった（社会科副読本おくしり島 奥尻町教育委員会編）。バチェラーはアイヌ人が大量に飲酒をすることを憂いており、そのため特に掲載したものと思われる。

ガイドブックの情報には、一般的情報でかつ客観的であることが暗に求められているが、奥尻島の選定についてはバチェラーの主観が強く出ている。禁酒が守られていることはポジティブ情報であるが、この時代、それが外国人へのアピールになるかは判断できない。

地形については、火山が多いことから地震が多いと推測、しかし本州などのほうが地震は多いので大きな災害にはならないと説明している。さらに山岳が多く、絵画のように美しい景観は見る価値があること、また古来日本人は富士山に似ている山に富士の別称をつけること、蝦夷富士（羊蹄山）頂上からの景色は絶景であると絶賛しているが、その一方で同山には、道路がないため、登山は困難と説明している。

日本の山岳については、英国の登山家であり宣教師のウェストン（Weston Walter1861-1940）が南北日本アルプスを踏破、1896年に「日本アルプスの登山と探検（MOUNTAINEERING AND EXPLORATION IN THE JAPANESE ALPS）」で日本の山岳の美しさを海外に広めたといわれる。英国人は登山を好む民族といわれ、訪日した外国人のなかで、サトウを始めとして飛騨山脈に外国人が登山しているが、いずれも英国人であった。バチェラーが登山を好んだかどうかは定かではないが、アクティビティの一つとして山岳登山についても触れていることは、特記すべきことと言える。

気候については、内陸では大気は乾燥して健康に良いとして、冬季は雪に覆われるといえども夏季は爽快と絶賛している。そして、自身の経験から、日本南部以南、中国や香港に住む欧米人にとって、北海道は健康リゾートであるとしている。また北海道は他の地方に比類ない水資源を持ち、河川と美しい湖沼が多く、加えてミネラルウォーターと温泉が多いことも絶賛している。そのため、種々の魚類や水鳥が多く、釣りや狩猟者にはよい環境であること、「阿寒湖」と「蕁菜湖」は最も見る価値があるとしている。また、石狩地方には景観の良いところがあり、札幌から炭鉱のある幌内、もしくは室蘭より札幌にいたる途中が最もよいと指摘している。

第二章の行程記は前半に、交通・アイヌ人・釣りや狩猟、服装や食事における注意事項

を、後半は2週間のモデルルートの紹介になっている。

交通では、北海道と合衆国、カナダは、ヨーロッパと同じくらい確実迅速に一等郵便汽船により輸送が可能になったとして、サンフランシスコやバンクーバー、香港および上海から長崎、神戸、横浜との汽船の便があり、陸路・海路にて函館に到着後は迅速・確実・便利に道内の移動ができると説明している。また、郵便も北海道全島に通じ、迅速で完全であり心配はないとしている。

釣りや狩猟は当時の欧米人のスポーツやレクリエーションのひとつであった。マレー社の中央部・北部日本旅行案内でも、狩猟免許の取得についての記述があるが、狩猟物の具体的な指摘はない。この案内記では、釣りについては、サケや鱒の川釣りを、狩猟については、熊撃ちの解説をしている。

英国人が狩猟(shooting)というとキツネ狩りのことであるが、シカやクマ、ノウサギも捕獲した。なぜバチェラーが、熊撃ちのみ解説したのか真相はさだかではないが、アイヌ人にとって鹿猟は生計の柱であるので、各コタンで乱獲をしないようにしていたため、バチェラーが何らかの配慮をしたことも考えられる。バチェラーは狩猟許可証を説明し、さらに熊撃ちには、アイヌ人の案内者の忠告を聞くようにと結んでいる。

衣服については、北海道案内記にはあまり詳しい記述がない。冬季には防寒服が必要であることは述べられているが、具体的に指摘されているのは、アイヌ人居住地に行く場合の蚊帳、ノミ捕り粉、そして乗馬をする場合は、馬鞍及び騎馬用衣服である。

食べ物についても同様で、具体例はないものの、パンや牛肉は得難いとして、ビスケットやリービッツの牛肉エキス⁴とコンビーフの携帯を勧めている。マレー社のハンドブックは、加えてチーズ、ドイツのピースープソーセージ、塩とマスタード、ウスターソース、缶入りミルク、ベーコン、紅茶と砂糖、ジャムが有用としているが、北海道案内記にチーズや缶入りミルクの記載がないのは、1875年に北海道開拓庁七重勸業試験場で練乳とチーズを試作し、実際にチーズ工場が稼働していたからであろう。

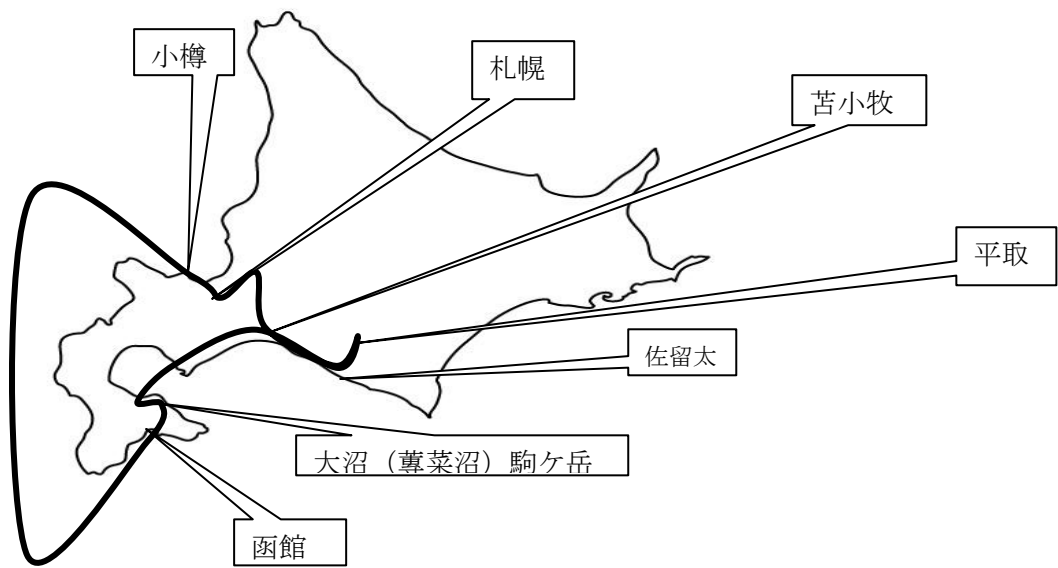
さて、バチェラーは、道内をめぐる2週間のモデルルートを次のように挙げている。函館滞在2日、蕁菜沼において1日、駒ヶ岳登山1日、蕁菜沼より室蘭に到る行程1日、室蘭より佐留太に到る行程1日、佐留太より「ピラトル(平取)」日帰り往復1日、佐留太より苫小牧に到る行程1日、苫小牧より札幌に到る行程1日、札幌滞在3日、小樽滞在1日、小樽より函館に至る行程1日で合計14日間である。

(表 2-2)

表 2-2 バチェラーが提案したモデルルート

1～3 函館	・海路の交通説明 ・宿泊施設案内（埠頭に接近する日本旅店（角上、三木、丸和旅店）） ・函館市街案内（函館山・市街地位置情報） ・美しい建物（郵便電信局、町会所、商業学校、病院等） ・推奨する観光地（函館山登山・函館公園・博物館谷・地頭山溪）	函館泊
4 蓴菜沼	・位置と移動の交通案内（常に往復する馬車や馬の便がある） ・宿泊施設案内（旅店は二箇所あるが、「丸三」と称する旅店が良い） ・推奨する観光（徒歩で湖辺散策、舟での湖畔遊覧） ・釣り情報（釣りはできるが、フライフィッシングには向かない）	蓴菜沼泊
5 駒ヶ岳	・駒ヶ岳登山（馬で半腹までのぼり、半時間ほど歩いて噴火口に到着するルート） ・蓴菜沼で宿泊するか、馬で森村へ行き宿泊（森の最良の旅店は「へ加」）	
6 室蘭	・移動交通案内（馬で森村へ出発し、森村より室蘭行の汽船に乗船） ・宿泊施設情報（「丸一」）	室蘭泊
7 佐留太	・移動交通情報（室蘭から小舟に乗って「イトツケレップ（現在の御崎駅付近）」駅から鉄道に乗車して苫小牧下車。着後馬を雇い、勇払（苫小牧市勇払）に出発、さらに佐留太（日高町富川）に向かう） ・宿泊施設情報（苫小牧「カネス」旅館で荷物の投下）	佐留太泊
8 平取	佐留太より「ピラトル（平取）」往復 ・地域情報（到着後の曾長「ペンリ」訪問） ・推奨する観光（アイヌ人のまち・義経神社）	佐留太泊
9 苫小牧	・移動交通情報（佐留太ー勇払ー苫小牧まで馬・朝 8 時に出発しても 12 時過ぎに着くので、札幌行きの列車には接続しない）	苫小牧泊
10～12 札幌	・移動交通情報（鉄道 苫小牧ー岩見沢乗換ー札幌） ・車窓の景色（苫小牧ー岩見沢は期待できないが、岩見沢ー札幌の間での石狩川の眺望はよい） ・宿泊施設情報（豊平館・吉田、山形屋等） ・地域情報（北海道の首府・北海道庁・絹、大麻、亜麻、砂糖等の製造所、製材や製粉所、ビール醸造所、葡萄酒、「ブランデー」製造所等） ・推奨する観光（農学校の博物館および庭園、農学校付属農園及び公園、植物園、真駒内の牧場ならびに円山登山） ・鮭、鱒釣りは（札幌中央を流れる豊平川および対 雁 川または、ヲサトナイ川（長都川）^{ついでに}） ・札幌近郊での推奨観光 ・「カリキ（雁来）」から対雁川下り、石狩川經由「イベツ（江別）」、列車で札幌に帰る。 ・幌内炭鉱視察（午前 7 時札幌発の列車にて幌内日帰り） ・定山溪温泉（鱒釣りができる。）・千歳湖（支笏湖）	札幌泊
13 小樽	・移動交通案内（鉄道） ・宿泊施設情報（最良の旅館は、越中屋および「キト」） ・推奨観光（手宮洞窟）	小樽泊
14	小樽港で、正午に出帆する函館、横浜、神戸に向かう汽船に乗船することができる。	

図 2－1　バチェラーが提案したモデルルート図



出所：バチェラーが提案したモデルルートを参考に筆者作成

また、十分な余裕がある場合への参考に、有珠、登別および上川を記述している。(表 2-3)

表 2-3　追記行程

有珠	・ 位置情報（海岸線や近郊の景色はすばらしく、芸術家の画材に事欠かない） ・ 移動交通情報（室蘭から小蒸気船で紋別（伊達紋別）に行き、馬を雇う） ・ 宿泊施設情報（阿部農助旅館） ・ 推奨する観光（活火山である臼が岳（有珠山）の火口付近の眺望・洞爺湖） ・ 周辺情報（湖中には、常に鱒が群集・アイヌ人の酋長「キコトック」に案内を依頼すること）
登別 火山	・ 位置情報 ・ 移動交通情報（登別村から馬を雇う） ・ 宿泊施設情報（夜間は山中に滞留せず、登別村に帰宿すること） ・ 推奨する観光（上下2か所の噴火口（現地獄谷）・登別温泉の薬効）
上川	・ 位置情報 ・ 現地情報（1890年、北の宮殿建設地と定められた。鉄道が開通すれば、見学に充分価値ある地方になる。石狩川沿岸の景色および近傍諸山の眺望は、美麗）

2-3 ガイドブックが書かれたいきさつ

北海道案内記の緒言は次のとおりである。(原文を筆者が和訳し要約した)

「この小冊子は、函館商工会の依頼により作成されたもので、アメリカ大博覧会場内の北海道の部の見学者に配布するものと知り、当初は引き受けるのをためらったが、今回の執筆は、既に収集したものを整理、要約などでできるものであり、本業を妨げないことから、函館商工会幹部からの委嘱を受けることは義務であると考え、依頼を引き受けた。商工会より示された趣意は、「北海道の地理概略」「来道者が利用できる簡単な案内記」をつくることである。そのため、できるだけ簡潔に記述することに努力した。

1892 年 1 月 札幌において ジョン・バチェラー」

この博覧会は、1893 (明治 26) 年の「シカゴ万国博覧会」⁵である。シカゴ・コロンブス記念博覧会は、1893 年 5 月 1 日から 10 月 30 日まで、19 カ国が参加、総入場者数は 2750 万人にのぼり、19 世紀最大の博覧会とも称された。コロンブス大陸発見 400 周年を記念して開催されたシカゴ博覧会は、15 以上のパビリオン群と、フェリスの大観覧車が人気であったが、特にアメリカがヨーロッパ、旧世界より工業的優位に立ったことを誇示するための博覧会であったといわれる。味岡 (2006) は、日本の博覧会への出品を、国威発揚と貿易の拡大に加えて、アジアの中で唯一近代化を果たした国家であるという優位性を訴え、植民地主義志向を正当化する方便にしたと指摘する。また宮武 (2006) は、シカゴ博覧会は本格的な先住民展示が行われた米国で最初の例であると指摘している。

このころの北海道の輸出品は海産物が主力で、特に昆布は輸出品の 40-70%を占めた。

一方輸入品は、明治初期は綿製品や毛製品、米、砂糖、石炭、雑貨が多かったが、その量は直輸入というより、横浜からの移入のほうが多かったとされる。そのため輸入品を扱う商人が力をつけてきた。そのなかに、今回の案内記の発行者である平田文右衛門がいる。

平田は、7 代目の呉服太物商の二男として地蔵町 (現・豊川町～末広町) に生れた。呉服商は将来発展の見込みが立たないとして、1875 年、店は和洋建築金物商に替わった。平田は 1888 年に設立された函館商工会の活動に大きく係わったが、設立された商工会は、海産物の荷造りや製法の改良運動や函館港の輸出入貨物や船舶調査などを行った。そのなかでも万博出品は画期的な出来事であったと函館商工会議所史に記されている。

商工会の出品については、前年 2 月に、函館商工会の会員で博覧会の北海道委員である平田文右衛門から出品についての紹介文が送られてきたことにはじまった。北海道および函館の宣伝のため、「函館港および北海道概況一覧表」「函館実測図」「函館真景 (絹絵巻)」「北海道全図」「北海道各地写真」そして、欧文挿画 50 ページの小冊子である「北海道案内記」(写真 2-1) を出品した。費用については、1200 円あまりであり、会員と一般市民の寄付金であったという。

平田が博覧会の委員会とどのようなかわりがあったかは不明であり、英国人であるバチェラーに北海道案内記の執筆を依頼したいきさつについても、記述されたものがないが、

バチェラーは学校（1888 年アイヌ人にキリスト教に基づいた教育をするために設立された愛隣学校）設立に熱心であり、平田も 1877 年、杉浦嘉七や渡辺熊四郎らと内澗学校（小学校）や鶴岡学校（貧児教育）の開設に奔走したことから、接点は多かったように考えられる。

出品した結果について、「函館商工会沿革史」では、「地方の状況を海外へ発表するために出品したのはわずかに函館商工会であり、北海道案内記のようなものを配布したのは、ほかに京都案内記だけであった。日本国の事情に注目する人たちは日本国の事情を書いたものを望んでおり、皆、日本国に蝦夷という地域があることを聞いて、一度これを観たいと言ひ、実に喜ばしい」とある。このことから、この案内記は北海道の広報宣伝のみならず、外国人の来道促進のひとつになったと思われる。

この出品物は好評で、博覧会の「優等」と認められ賞状と賞牌が 1897 年に函館に届けられたが、函館商工会は前年に解散しており、函館商業会議所に寄贈された。

3. 特徴的な記述

この時代のガイドブックとしては、英国のマレー社の「中央部・北部日本旅行案内 2」があるが、その第二版では、第一版にある地理・気候・日本語・遊歩規程・内国旅券・狩猟免許・通貨・度量衡・参考書と地図・手荷物・服装と食料・旅宿・道路と乗り物・その他の 15 項目に加えて、日本の入浴と温泉・旅行心得・主要ルート一覧・電信局全覧・宗教（仏教と神道）動物学・植物学・絵画・彫刻を加えている。庄田（1996）は筆者である英国人アーネスト・サトウが、英国マレー社のガイドブックシリーズの一冊として刊行することを初めから意図していたとし、マレー社のスタイルを踏襲していたと指摘する。バチェラーも同じ英国人であり、英国人旅行家イサベラ・バードの北海道旅行についても深くかわり、また北海道案内記にもマレー社のハンドブックという固有名詞が数回登場していることから、このスタイルを踏襲したものと思われる。（付表）

しかし、サトウの中央部・北部日本旅行案内にないものとしては、「開墾に適する土地」「鉱物」「魚類」「北海道通商の関係」がある。開墾に適する土地としては、耕作に適する土地は少なく、また地味も肥えていないが、開墾の余地は十分あること、草地は充分あり牧場に適すること、また、具体例として札幌産のリンゴ、梨などは輸入品に比べはるかに優れていると記述している。

一方、当時輸出の主力であった魚類については、よい漁場があり、中国沿岸に近接しているため、乾魚や昆布等を常に各国市場に輸出する便益があること、豊富な石炭、硫黄などがとれること、そしてその採掘地の具体的地名をあげて紹介している。

また、総論のまとめとして、北海道通商の関係では、北海道は有数な資源をもち、日本国内でも重要地であることを強調、またロシアならびに清国と接近しているために、両国との関係強化の可能性と、米国と上海の海上輸送の通過点に津軽海峡があることを踏まえ、北海道は将来発展するとしている。これらの項目は北海道や函館の宣伝というより、万博

での米国人への配布を意識した通商誘致策のひとつであったと考えられる。その点、バチエラーは平田の意図をよく理解していたと思われる。

北海道案内記の第一章、総論では、上記のほかに「開墾に適する土地」「草木類」「動物」「鉱物」「魚類」「北海道通商の関係」が述べられている。緒言から、北海道庁より統計上の資料収集の便宜を得たこと、植物学については、札幌農学校の宮部金吾、動物学については、小寺甲子二という当時の著名な学者の協力を得たことがわかる。

前述の、外国人誘致のために設立された喜賓会 (Welcome Society) が刊行した旅行案内 (A guide-book for tourists in Japan (喜賓會, 1907)) にはこういった項目が見当たらないことから、これらのことは、サトウらが刊行した中央部・北部日本旅行案内にも、同様の記述があることでもわかるように、こうした学術的な内容をガイドブックの総論に織り込むことは明治時代の外国人が執筆したガイドブックは英国人を中心とした日本学 (Japanology) の系譜があると推測できる。

また、バチエラーは北海道の魅力として、手つかずの自然と、スポーツレクリエーション、そして、アイヌ人を見ることを挙げている。バチエラーは、アイヌ民族が激減していることを憂い、このままでは消滅もしくは日本人と混血となり、日本人と区別できなくなると予測した。バチエラーは有珠または千歳で、アイヌ部落を見学することを勧め、さらに、少し日時を費やして、ピラトル (平取) で詳細に観察することを勧めている。そして平取周辺の景色は最も美しい景観であると称えている。

庄田 (1996) は訳書「明治日本旅行案内」の解説で、こうしたハンドブックへの寄稿者は、ごく一部の研究者を除いて外交官、医者、軍人、宣教師、技術者であることを指摘、彼らの日本研究の動機は、日本に対する限りない好奇心と深い知的探求心であったとしている。ただ、バチエラーの場合の探求心はアイヌ民族にむかって直線的ともいえるので、同じ英国人でも異なった見解をもっていたのだろうと考えられる。

一方、モデルルート選定についても、当時の日本人には考えられなかった外国人旅行者に対する視点がみられる。

ひとつは、スポーツレクリエーションについての記述の多さである。北海道も近年、来道外国人旅行者に対して、スポーツレクリエーション体験をプロモーションの前面に押し出すようになったが、この北海道案内記にはいくつかのアクティビティ (体験活動) の具体的な記述がみられる。

登山は、函館山、駒が岳、有珠山、円山で、市街地やアイヌコタンの逍遥、湖沼での徒歩で湖辺散策や舟での湖畔遊覧 (蓴菜沼や大沼、千歳湖 (支笏湖)、洞爺湖) 釣り (蓴菜沼、洞爺湖、札幌近郊では、豊平川、対雁川または、長都川での鮭、鱒釣り) 平取でのアイヌコタンや神社などのエスニック文化体験、雁来からアイヌ人の獨木 (うつろ) 舟に乗っての川下りなどである。温泉については、定山渓と登別の記述はあるものの、目立った記載はなく、当時の英国人は病氣療養のための温泉利用であったことがうかがわれる。

二つ目には、官主導で行なわれてきた北海道開拓に対し、民間が力をつけてきたという

表現である。特に札幌は松前や函館と異なり、開拓使管理の農学校や屯田兵などもっぱら公の事業にて繁栄したが、公共事業で行われたものは過去のもので、札幌は今、政府の扶助を仰ぐより、自助努力で現在を築いているとしている。商業的な意味合いが強い万博を意識して、民間色を強く打ち出したと考えられる。

明治時代に海外から外国人旅行者が日本をどれくらい訪れたかの記録はないが、長坂(2010)は明治初期の外国人向け旅行ガイドブックの読者は日本に在留している外国人と短期旅行者を想定していたとしている。確かに 1872(明治 5)年には、英国のトーマス・クック社が企画した初の世界一周ツアーのコロラド号が横浜に寄港しているので、すでに明治初期に日本に来る外国人旅行者がある程度いたと推測できる。また、19 世紀後半、ヨーロッパ各国の新設された民族博物館は、アイヌ文化へ関心を持ち、こぞって日本にいる同胞に働きかけ、アイヌのコレクションを積極的に集めるようになった。特にアイヌ人は形質人類学者にとっては、研究の後れを取らないように自ら来道したり、調査団を派遣したりしたこともある。

この北海道案内記が北海道へのアメリカ人を中心とする外国人の旅行地への誘致にどのくらい繋がったかは未知数ではあるが、その内容を概観すると、外国人が自分たちの生活水準をできるだけ維持しながら旅行することができること、そして彼らの冒険心をそそるような項目について説明していることが当時の旅行情報の大きな特徴と考えられる。

4. 北海道案内記の意義

以上のように、北海道や函館の広報宣伝のために作られた北海道案内記であるが、ここに二つの意義を見出すことができる。ひとつは明治中期のマレー社の日本案内書である、「中央部・北部日本旅行案内」に、北海道案内記のベースになったバチェラーの資料が利用されていることである。バチェラーの北海道案内記が何部印刷されたかは定かではないが、マレー社のガイドブックは版を第 9 版まで重ね、およそ 40 年近くも発行され続けていたので、北海道、特に函館周辺と札幌や小樽は、もっと多くの外国人の目に触れていたと考える。

先行研究では、明治時代の英文版ガイドブックで、ゾーニングや観光地の分類など内容の比較分析がいくつかあるが(里居 2003・古谷 2009・長坂 2010 など)それらによると、明治時代に刊行されたガイドブックは 87 冊あるといわれている。明治初期のものは、主に横浜案内など、開港に伴うものであった。その後、東京や京都などの都市の案内が刊行され、そして鉄道の延伸と 1858(安政 5)年から続いていた外国人の内地旅行制限(外国人は開港場などに設置された外国人居留地での居住及び 10 里四方の外出を除いての日本国内の移動は禁じられていた)が 1899 年に廃止され、内地雑居制度に移行された後は、対象地が地方の都市や日光などの観光地や景勝地などに広がっていった。しかし、北海道に限定してみると、外国人が北海道(蝦夷)について記載しているものは、ほとんどが紀行文であり、ガイドブックとして書かれたものは、英文版の場合非常に少ない。従ってマレー

のハンドブックにバチェラーが集めた情報が掲載されることは、北海道案内記の大きな波及効果であると考ええる。

大西（1998）は明治以降昭和戦前までの北海道における観光的取組を、観光取り組みが重点施策に付随していた萌芽期（1869（明治2）年～1902年）、拓殖振興を目的に観光的取り組みの導入期（1903年～1920（大正9）年）、拓殖振興、北方文化建設を目的に観光的取り組みが開花期（1921年～1940（昭和15）年）と3期に分けた。

北海道案内記が刊行された1892年は萌芽期に属するが、道都創建、移住促進、そして外国人顧問団招聘の諸策に付随した豊平館開設から、中島公園、赤レンガ庁舎などの施設づくりが行なわれ、さらに勸業振興のための北海道物産共進会（1892年）などが開かれるなど、道外資本を誘致し、誘客を意識した動きが見え始めた時期に当たる。さらに大西らは、この時代招聘された外国人が技術指導などの傍ら、北海道内をまわり、登山やハイキング・キャンピングを行ない、北海道に避暑思想を持ち込んだと指摘するが、バチェラーも同様に自らの体験から、北海道の自然環境を利用したアウトドアアクティビティ、アイヌ文化などを広く海外に伝えようとしていたと考えられる。

二つ目は、この旅行案内記が万国博覧会で出品物として会場におかれたことである。1878（明治11）年のパリ万博にも、日本は約4万点を出品するが、そのうち石炭や銅、鯨搾粕、鱈肝油など銅賞を得たものは、ほとんど開拓使の事業の成果物であった。シカゴ万博が商業ベース万博の走りであり、米国が力をつけて誇示したい時期に、博覧会会場を訪れた多くの米国人に、輸出品のみならず案内記を披露できたことは、北海道の文化力を示すことができたことになる。特に函館はいち早く開港したものの、横浜・長崎と比べ、位置や人口、産業構造で輸出条件に恵まれなかった。しかし、文化面でいえば早くから外国人の提言を取り入れ、街づくりが進んでいたといえる。すべてが海外からの文化の移入ではなく、地域生活にあり合わせて、和洋折衷や和魂洋才という極めて合理的、かつ優れた地域文化を作り上げようとしたところがある。

例をあげると1879（明治12）年に開設された函館公園は公園の開設に当たって多くの市民が、寄付金集め、草花の栽培・手入れなどを行なって作られた。また、同時期にホーレス・ケプロンの、大学、博物館、図書館の必要性の建言を受けて、函館公園内に開拓使函館仮博物館を開場して、日本における地方博物館の先駆けとなった。また、海外貿易港としての進展に伴ない、人々の生活や街並みも変化した。函館でも谷地頭や湯の川の温泉地に豪商の別荘が建ち、1883年には、幼稚園が函館に初めて開園している。

一方、札幌には1871（明治4）年、最初の公園である「偕楽園」が岩村判官の命で北7条西7丁目を中心に開設され、さらに園内に貴賓接待所「清華亭」が設けられた。のちに競馬場も併設されたが、1886年に中島に遊園地が開設され、そこに常設展示が可能な北海道博物陳列場が建設されたため中島公園に競馬場は移転した。1889年には、開拓使の御用商人であった岡田佐助が、和漢洋の様々な花卉を植え岡田庭園を設置、北の『東臯園（とうこうえん）』と南の岡田花園として人気を誇ったという。前後して公園内に「大中亭」レス

トランが設けられたり、公園の池に釣り堀や貸しボートが登場して、現在の中島公園に近い形ができていた。このように、北海道は本州とは異なった近代化の道のりを辿り、それらは現在でもランドマークになっている。

1926（昭和 1）年に発売された旅行ガイドブック「ミシュラン・グリーン」にはガイドブックに取り上げるにあたって設けている「9 つの基準」がある。「旅行者がその観光地を訪れたときに受ける第一印象」「その場所の知名度」「文化財の豊かさ（記念建造物や美術館の数）、レジャーの充実ぶり（アクティビティ数）」「受賞歴や世界遺産などの公的評価」「芸術品や史跡の固有の美術的価値」「美観」「作りものではない本物としての魅力と調和」「旅行のしやすさと利便性（施設整備、アクセス、維持管理など）」「旅行者の受け入れ姿勢の質」がその項目であるが、ヨーロッパ型の評価とはいえ、地域の文化力が評価されていることを考えると、文化の発信が「日本らしさ」ではなく「北海道らしさ」そして「生産物」から「地域の文化」が表現された北海道案内記の意義は深いものと考ええる。

5. 終わりに

北海道案内記においては、北海道は自然資源が豊かであり、日本を代表する観光地である東京・横浜・京都・神戸、そして早くから開けていた長崎とは異なる文化の形成がなされてきたこと、特にアイヌ文化が注目されていたこと、交通の発達によって、未開の地と呼ばれていた北海道も外国人でも旅行できること、アウトドアアクティビティが可能であることが、外国人の視点からみると魅力的であると紹介されていることが分かった。

先行研究でも、喜賓会など日本側が作成したガイドブックは、どちらかというと「することより「みせる」ことに重点がおかれていることが指摘されているが、この案内記では、集客交流というより貿易促進という日本側の意図を十分に理解したうえで、文化とアウトドアアクティビティに重点をおいて書かれていたことは、現在の来道外国人に対する北海道のプロモーションに、体験観光は欠かせないものであるとの示唆を与えていると考える。

明治時代は、開拓による勧業振興だけでなく、開拓使が招聘した外国人によって、文化施設など様々な観光施策に通じるものが初期に造られていた。様々なガイドブックに関する調査研究は、それらがどのように広報されてきたかを知る上で研究上の価値を有する。

しかしながら、いくつかの課題が残されている。大きなものとしては、ガイドブックの定義がいまだ定まらないことである。ガイドブックは単なる観光情報だけでなく、地域の文化を象徴するものが掲載されているものであるとすれば、関連事項も含め精査する作業も重要と言わねばならない。また、ガイドブックに記述された内容の信頼性や記述主体の主観や客観の区別についても慎重な判断が求められる。さらに、その内容が、ガイドブックに期待される読者の本物に対する強烈な求心力をもつようになるかは、その判断の所在が読者や旅行者の価値観にあるため、もうひとつ踏み込みにくいこともある。

なお、情報化が進むと、従来のガイドブックのコンテンツの基幹であったナビゲーション機能は ICT の他のツールに移っていくこともあるだろう。しかし、こうした観光情報は、

観光者が現地へ行き、本物から感動を得るためのものであることから、何を、誰に、どの観点から伝えていくのかという基本は変わらない。その際、受け入れ側が考える視点だけではなく、来道外国人の視点はどのようなものなのかというマーケットインの姿勢も、北海道案内記と同様に重要と考える。

注

- 1) John Batchelor (1854 年 3 月 20 日 - 1944 年 4 月 2 日)

英国ロンドン南方サセックス州生まれ。幼いころから、貧しき者・弱き者を助けるように教えられ、虐げられている先住民族に大きな関心を持っていたといわれている。ケンブリッジ大学神学部を卒業し、母校の勧めにより、香港にある東洋で働く宣教師養成所へいくものの、体調を崩し、英国と気候風土の似た土地へ転地療養を勧められ、1877 年(明治 10 年) 23 歳で英国聖公会の宣教師補として函館に赴任した。キリスト教の伝道と同時に、アイヌ人の生活改善のために、各地に学校や無料の病院を設立するなど、アイヌ民族の人権向上のため努力した。布教の傍ら、アイヌ語を研究し世界初のアイヌ英和事典の編纂、出版などを行ない、「アイヌの父」と称された。

- 2) 原題は、“An Itinerary of Hokkaido; : presented by the Hakodate Chamber of Commerce to visitors of the Columbian Exhibition held at Chicago, U. S. A. in 1893.” By Rev. John Batchelor. 1893 発行となっており、翻訳本は『日本北海道案内記』で明治 26 年 6 月 24 日発行の非売品である。訳者は北海道庁士族 長岡照止(北海道渡島国函館区元町 5 番地)、発行者は北海道庁平民 平田文右衛門(北海道渡島国函館区末広町 10 番地)で、印刷所は、東京築地活版製造所である。

- 3) 原題は “A Handbook for travellers in central & northern Japan ; being a guide to Tokio, Kyoto, Ozaka, Hakodate, Nagasaki, and other cities, the most interesting parts of the main island, ascents of the principal mountains, descriptions of temples, and historical notes and legends ” Ernest Mason Satow/A. G. S. Hawes 著、1881 年、英国マレー社発行。邦訳は『明治日本旅行案内』上下巻、庄田元男訳、1996 年、平凡社。

- 4) リービッチの牛肉エキスはドイツ人リービッチが開発した肉のエキスで、今で言うコンソメスープの素(ブイヨン)である。

- 5) 英文名称は World's Columbian Exposition。会場は、シカゴ郊外のミシガン湖畔の公園を中心とする湿地帯を造成した約 700 エーカーの土地で、日本政府ははじめて、本格的な日本館(平等院鳳凰堂をモデルとして造られた「鳳凰殿」)を建築した。また、シカゴ万博では、計画から運営までを女性が行う「女性館」も建設され、女性による出展品や家庭用製品等が展示されたと言われる。日本は「貴婦人の私室」を出展したが、ほとんどの建物がその後の火災で焼失し、美術館のみが自然科学博物館として残っている。

付表 明治時代中期の英文版ガイドブックの章立て

	中央部・北部日本旅行案内 『明治日本旅行案内』（庄田元男訳）	『日本北海道案内記』 （長岡照止訳）	参考『日本奥地紀行』 （高梨健吉訳）
著者	Ernest Mason Satow/ A.G.S. Hawes	Rev.JohnBatchelor.	Isabella L Bird
原題	A Handbook for travellers in central & northern Japan ; being a guide to Tokio, Kyoto, Ozaka, Hakodate, Nagasaki, and other cities, the most interesting parts of the main island, ascents of the principal mountains, descriptions of temples, and historical notes and legends	An itinerary of Hokkaido; : presented by the Hakodate Chamber of Commerce to visitors of the Columbian Exhibition held at Chicago,U.S.A.in 1893.	Unbeaten Tracks in Japan
発行 年月日	初版 1881 年 改訂 2 版 1884 年	初版 1893 翻訳本明治 26 年 6 月 24 日発行	初版 1880 年 普及版 1885 年
出版社	ジョンマーレー社（英国）	東京築地活版製造所	パトナム社（米国）
章立て	Introduction（カルチャー編） ・日本語・遊歩規程・内国旅券 ^{パスポート} ・狩猟免許・通貨・度量衡・地図参考書 ・手荷物・食料など・旅宿 ・道路、乗り物、料金など ・日本の入浴と温泉 ・旅行心得、主要ルート一覧表 ・電信局全覧・地理・天候と気象 ・動物学・植物学・神道・仏教 ・絵画美術・彫刻美術	第一章 総論 ・地理・蝦夷歴史・千島 ・他の諸島・北海道地形 ・山嶽・開墾に適する土地 ・気候・河水・草木類 （樹木/灌木/年草/追記） ・動物（胎生類/鳥類） ・鉱物・魚類 ・北海道通商の関係	旅行記 横浜—東京 東京—今市 日光—大内 大内—新潟 新潟—小松 小松—神宮寺 神宮寺—秋田 秋田—青森 青森—函館
北海道 関係	函館と蝦夷回遊のなかで ①概観 ②函館 ④駒ヶ岳火山の登山 ⑤福山（松前）への海路道での往復 ⑥恵山 ⑦函館から陸路札幌へ ⑧南東沿岸の船旅—国後・択捉・ウルップ ⑦未収録経路の里程	第二章 行程記 ・交通の事 ・「アイヌ」人の事 ・遊獵 ^{スポーツ} （漁業の事/銃獵の事） ・旅装（衣服の事/食物の事） ・蝦夷地において 2 週日間を費やすべき行程 ・函館・湖水及び駒ヶ岳 ・室蘭より「ピラトル」に至る事・「ピラトル」より札幌に到る事 ・札幌 追録（有珠・登別火山・上川）	函館—森 森—室蘭 室蘭—白老 白老—佐瑠太 佐瑠太—平取 平取—白老 白老—長万部 長万部—森 森—函館

参考文献

- ・ ジョンバッチェラー著 長岡照止訳『日本北海道案内記』、北海道、1893 年。
- ・ アーネストサトウ編著 庄田元男訳『明治日本案内記』上下巻、平凡社、1996 年。
- ・ 味岡京子「1893 年シカゴ万国博覧会「女性館」への日本の出品：「女性の芸術」をめぐって」人間文化論叢 9 巻：お茶の水女子大学大学院人間文化研究科、2006 年、1～11 頁。
- ・ 宮武公夫「博覧会の記憶：1904 年セントルイス博覧会とアイヌ」北海道大学文学研究科紀要、2006 年。
- ・ 大西律子・渡邊貴介「明治以降昭和戦前までの北海道における観光的取り組みの展開過程に関する研究」観光研究 1998. 3/Vol19/No2、日本観光研究学会機関紙、1998 年、25～34 頁。
- ・ 里居真一他「明治中期に刊行された外国人向け英文観光ガイドブックの記述と内容の特徴」LRJ 66 (5)、2003 年、389-392 頁。
- ・ 長坂契那「明治初期における日本発の外国人向け旅行ガイドブック」慶応大学社会学研究科紀要、2010 年 101～115 頁。
- ・ 古谷秀樹・野瀬元子「外国人のための観光ドキュメント - 観光ガイドブックに着目して -」情報処理学会研究報告、2009 年。
- ・ 小内透「ディスカッションペーパー」北海道大学アイヌ・先住民研究センター、2012 年。
- ・ 旅の文化研究所編『旅と観光の年表』河出書房新社、2011 年。
- ・ 北海道貿易物産振興会発行『創立 30 周年記念 北海道貿易史』北海道、1995 年。
- ・ 函館市史編さん室編『函館市史』通説編第 2 巻、函館市、1990 年、788～813 頁。
- ・ 函館商工会議所『函館商工会議所百年史』函館 1996 年、22～23 頁。
- ・ 函館市、はこだて人物誌 平田文右衛門、函館市総務部。
http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/soumu/hensan/jimbutsu_ver1.0/index.htm
2012/05 取得。
- ・ Rev. John Batchelor, “*An Itinerary of Hokkaido; : presented by the Hakodate Chamber of Commerce to visitors of the Columbian Exhibition held at Chicago, U.S.A. in 1893.*” Tokyo, 1893.
- ・ Ernest Mason Satow/A.G.S. Hawes. “*A Handbook for travellers in central & northern Japan ; being a guide to Tokio, Kyoto, Ozaka, Hakodate, Nagasaki, and other cities, the most interesting parts of the main island, ascents of the principal mountains, descriptions of temples, and historical notes and legends.*” London, 1884.